

信仰生活のよりどころを盤石にされた師父

フランスス森紀旦主教逝去1周年礼拝説教 鈴木伸明

森 紀旦師父の略歴

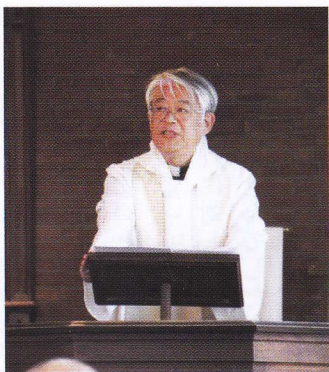
もり としあき

主教フランスス森紀旦師父の略歴を共に振り返ります。

主教フランスス森紀旦師父は、1940年1月1日、埼玉県にてお生まれになりました。東松山聖ルカ教会で信仰生活を過ごされてから聖職志願をされて聖公会神学院へ入学、1966年卒業されました。翌年執事に叙任され、1969年に司祭に叙任されました。

1970年、立教大学大学院文学研究科修士課程を修了、1971年から翌年にかけて、米国マサチューセッツ州ケンブリッジのエピスコパル神学校に留学されました。帰国後、前橋聖マツテア教会をはじめとする北関東教区諸教会で働かれるとともに、立教大学文学部キリスト教学科講師として、ギリシア語、新約聖書を担当されました。

この川越基督教会には1977年松平惟太郎司祭の後任として牧師に就任、初雁幼稚園園長としても活躍されました。11年にわたる当教会での働きの後、聖公会神学院校長でお



写真撮影 田中英夫

られた竹田眞司祭が東京教区主教に就任された後任として、聖公会神学院校長に就任されました。

2年にわたる聖公会神学院校長任務の後北関東教区へ戻り、高崎聖オーガスチン教会で3年間働かれました。

1993年、京都教区へ移籍されてウイリアムス神学館副館長に就任、翌年には館長に就任され、教会における働き人育成のため尽力されました。ご担当は新約聖書学、礼拝学でした。

1998年、日本聖公会中部教区主教に就任、以後11年にわたり中部教区主教として働かれました。

退職後は東京へ居を移され、日々を過ごしておられました。2018年7月10日、通院先にて倒れられ、

そのまま神様の許へ召されることになりました。あまりにも突然の出来事で茫然自失となったのを、昨日のことのように思い出します。

祈禱書 聖歌集の改訂に尽力

主教フランス森紀旦師父の働きは多岐多様にわたりますが、日本聖公会全体に関わることといたしましては、日本聖公会現行祈禱書、現在私たちが用いております緑色の祈禱書であります。約10年にわたります祈禱書改訂作業に関われました。

1世紀頃、礼拝は口語で行われていたことをもとに、文語だった祈禱書の口語化、東面式だった聖餐式が対面式になってきたのに伴う、対面聖餐式前提の式文改訂作業、1年周期だった教会暦を3年周期へ改めることなど、現在の私たちの礼拝の根幹にかかわる重要な改訂作業に関われました。また旧約聖書朗読後に、黙想の意味を込めて詩編を用いる習慣を回復されたもの、森主教様をはじめとする祈禱書改訂委員会の働きによるものです。

また、現在の日本聖公会聖歌集は2006年に発行されましたが、聖歌集改訂委員会委員長として働かれたのが森主教様でした。この委員会は1994年に設置され、12年にわたる改訂作業の末、2006年5月

に行われました日本聖公会総会で決議され、同年11月に発行されたものです。このように森主教様は、現在の私たちの礼拝に欠かせない、祈禱書および聖歌集両方の改訂作業に関われ、信仰生活のよりどころを盤石にしてくださいと言えましょう。本日、ご家族の皆様をお迎えして主教フランス森紀旦師父の逝去1周年記念礼拝をこの川越基督教会として行えますのは、私たち一同の念願であり、心からの喜びとするところ です。

信仰の姿が問われた改訂作業

私自身は1995年から北関東教区でお世話になることになりましたので、森主教様の北関東教区在任中に一緒に過ごした者ではありませんが、横浜教区時代より聖歌集改訂関係の集まりに参加させていただいて森主教様にお会いしておりましたし、2002年に聖歌集改訂委員になりました。それから4年間、東京・名古屋・京都・大阪で行われる委員会では毎月お会いし、かなりのスケジュールの中で改訂作業を一緒にさせていただくことになりました。その作業の中から思い出に残ることにつきまして、お話しさせていただければと思います。

聖歌の改訂作業のうち、原詩が英語などで、それを訳出して日本語の詩としている聖歌につきましては、原則として全曲、原詩を再確認することになっていました。現在の詩にとらわれずに一旦原詩の精神に立ち戻り、その上で、ある聖歌については原詩の精神を生かして思い切った訳出を行い、ある聖歌については原詩の直訳にかかわらず、意識をもとに詩を考えるとといった作業を行いました。原詩は英語である聖歌が大半でしたが、森主教様の優れた英語の知識に毎回感服していました。

聖歌の改訂作業を行う上では、どうしても自分自身の信仰が問われることとなります。聖歌の詩は、個人の信仰や思いを超えて普遍性を持つ内容でなければならぬ一方、自分自身の生き方がそこに関わり、実存が伴っていることが重要であるからです。そのため委員会ではしばしば、それぞれの信じる神様の姿や、神様と自分自身のつながりについて激しい議論が交わされることもありました。

悩み続ける人間の姿を重視

森主教様の訳詩の根底には、この世界の中で悩み続けるように歩んでよいかわからない人間の姿がありました。悩む人間、悩み続け歩めな

いでいる人間を、神様は無理に歩ませようとせず、その場にしっかりと留まりつつ、神様の愛を実感しつつ過ごしてよいのだということに主眼が置かれていたように思います。

私はそれがなかなか納得できませんでした。この世界は神様が時を定めておられるのだから、その時を指して歩んでいくことが必要であり、その導きを祈ることこそ、聖歌の詩の重要な要素でなければならぬのではないかと、悩み続け歩めないでいる人間を詩に表現するのはよいけれども、それだけでは不十分であり、そこから引き上げ、希望へ導いてくださる神様についても詩に含めなければ不十分であると主張しました。動いている自転車が倒れないように、私たちも留まってはならず、神様の導きにしがたがって不断の歩みを続けていかねば希望を見いだせない、聖歌の詩にもそのことを含めなければ十分とは言えないと主張したので、これは40代前半であつた私の実感でした。それに対して森主教様は多くを語られませんでした。混んとした世界の中で悩み続ける人間の姿を、どこまでも重視なさる姿勢は、聖歌集改訂作業の中で変わることはありませんでした。

当時の森主教様の年齢に、自分自身が間もなく達しようとしています

が、神様との時間を持てば持つほど、人生経験を重ねれば重ねるほど、自分自身の歩みや決断は慎重でなければならず、自分自身が信じる方向へやみくもに向かつて突き進めばよいのではないと、森主教様は当時の私に語っておられたのではないかと、なんでもかんでも自分自身の体を張って歩んでいけば神様と出会えるのだと安易に考えないように、森主教様はよく注意するように、私に言っておられたのではないかと、今更ながらに思います。

時代に流されず真理を見出す

昨年1月13日に逝去された、モニカ松本操さん、5月3日に逝去されたステパノ松本博一さんの葬儀の時に、森主教様は当教会においてくださり、告別のお祈りをご奉仕くださいました。「もう大きな声を出せないんだよ」とおっしゃっておられ氣になりましたが、近日中にまたお会いできるだろうと全く疑いもしませんでした。しかしこれが森主教様にお会いした最後の時となりました。

11年牧師として働かれたこの礼拝堂に、本日多くの皆様においていただき、森主教様逝去1周年の礼拝をささげることができまうのを感謝いたします。現代社会はどんなことでも性急に答えを求めがちです。デジタル時代が示す通り、明確な判断



や数字で表せる尺度にのみ価値が見出され、目に見えない存在や測れないことを大切にしようとしなないことが多くなっています。また、聖書が語る忍耐や希望を待ち望む生き方も行いにくくなっているような氣がします。

私たちは森主教様のご生涯から、神様への祈りと導き、自分自身の悩みにしっかりと留まりながら、今の時代に流されず、目に見えない真理を見出しながらしっかりと歩んでいく大切さを学びます。よい模範を示してくださった主教フランシス森紀旦師父の魂の光明と平安を祈りつつ、パラダイスに憩われているすべての方々との交わりの聖餐式を共に続けてまいりましょう。
〈7月13日〉